

[5.11 つくば農林業問題研究会 参考資料]

これから “ 問題 ” を考えるための覚書 - 思いつくままに

塩谷哲夫

(1963 ~ 東大農場、 1968 ~ 農林(水産)省:畜試・草地試・農事試・農研センター・中国農試・北陸農試、 1990 ~ 東京農工大学農場・1999 ~ 大学院農学研究科国際環境農学専攻)

1 . これからなにをすればいいのだろうか？

研究？ 運動？ 主体は？ 対象は？

1 . 日本の「食料自給」を考える

1. “ 食料 ” と “ 食糧 ” のちがい。“ 自給率 ” と “ 自給力 ” のちがい。

2. 「自給率向上」(数値としての)それ自体が目的なのではない。限られた日本の国土、しかもこんなにも恵まれた日本の農林業的自然環境資源を、日本人のより豊かな暮らしのために、如何に有効に活用するか - それが私たちの考えなければならないことではないのか？ - その結果として生産される農林産物(食料等)。

私は山の資源をもっと使いたい。

3. 「コメを作る農地は少ないほどよい」 - 川田先生に教わったこと。

“ 集団転作 ” はすばらしかった。それなのに…。

ようやく、畑作物 - “ 転作 ” から “ 本作 ” へ。

3 . 日本の農林業の「担い手」を考える

1. 大規模・低コスト - それはそれでいい。特に基本食料(コメしかない?)。その方がいいし、必要だ。

2. 地域資源を活かす集落営農・営農集団。中山間地域のこと、耕作放棄地のこと。

3. 地域特産畑作物（バレイショ・カンショ・ビート・サトウキビ・ナタネ・…） - これらは家族経営・複合農業によって作られる。

（しかし、考えさせられた石垣島のサトウキビ）

4. 新しい農民像 - 「上越アグリントピア」のひとつ。

5. “新規参入者”として農民となった私の学生たちのこと。

6. “農業”でなくて、“農の営み”でもいい - 神奈川県“地域興しマイスター”としての調査から。消費者も農業生産・土地利用の大事な担い手

7. 「(独)農業者大学校」のカリキュラム作りにかかわって。

8. 16歳のはじめて“農業”を学ぶ生徒達のために - 農業高校の教科書作りに関わって。

5 . 日本の農業技術力・技術研究

1. MAFF「資材問題検討会」の委員として分かったこと。

2. 「これまでの（農業）技術開発施策に対する評価に関する調査研究」（STAFF）の委員、「21世紀プロ（==系）」評価委員を担当して - 日本の農業技術開発最前線のすばらしさをあらためて認識する。

3. 持続可能な農業の確立のために - 研究方法論上の問題

6 . 「環境保全型農業」と「持続可能な農業」は同じものか？

7 . “世界”の視点も必要。「国際環境農学」の先生として途上国の学生たちをあずかり、各地を回って考えさせられた日本の役割。ODA, NGOによる農業開発・社会開発協力。途上 国の農産物の受け入れ市場としての日本。日本の「近代化」以来の正負の歴史的経験。